

NPO法人

女性と子どものエンパワメント関西

NEWS LETTER

第9号

2003.3.25

目次

田上時子のエッセイ 少子化の本当の原因は?	1
特集 行政・NPO協働事業助成金獲得! ひょうごボランタリープラザ訪問	2
子どものための性教育ワークショップ プログラム、シナリオ完成	4
講座案内 エリザベス・クレアリーさんの	
スター・ペアレンティング & 不安と怒りの対処法	5
リレーエッセイ 竹下郁代／林玲子	6
講座インフォメーション	7
会員の紹介・入会のおさそい	8
編集後記	8

田上時子のエッセイ 少子化の本当の原因は?

7号から、NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西 理事長 田上時子がエッセイを連載しています。いまそこにある問題に対して、NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西は何ができるのか、具体的にその目指すものについて語ります。

第2回少子化対応推進全国フォーラム in 佐世保（主催：第2回少子化対応推進全国フォーラム in 佐世保実行委員会・少子化への対応を推進する国民会議）の分科会のパネリストの1人として招かれたので、1月31日、2月1日と佐世保に出かけた。

一般市民や行政関係者約2,000人が参加し、第一日目は「リング」などのベストセラー作家として知られる鈴木光司さんによる基調講演から始まった。鈴木さんは妻が高校教諭で自分は自宅で作家修業という夫婦関係の中、娘2人の子育てと家事を担いながら、作家デビューを果たしたという。「15年間の子育ての体験によってテーマが固まったり、表現力も深まるなど、作家としてレベルアップできた」「育児・家事をして子どもと関わってきたお陰で娘たちは今も父親大好き」という話は好感が持てたが、続く厚生労働省や企業社長、大学院教授による「『子育て』って誰がするの？一家庭で、地域で、企業で・・・いろんな子育てを考える」と題してのシンポジウムは、会場の講師特別席で座させていただいて不満を言うのもなんだが、終始納得いかない思いで聞いていた。子育て支援の具体的な案もなく、「国民会議のシンポジウムはこの程度でいいのか」と思ってしまう内容であった。大学院教授は「調査によると子どもたちは家に母親がいて欲しいと望んでいる」と語り（父親に家にいてもらいたいかどうかの調査はしていない）、厚生労働省の役人は「産めよ、増やせよと言っているわけではなく、量より質を言っているんです」（それが親のプレッシャーになるというのに）と言う。

前日のせいで翌日の分科会ではわたしのテンションはかなり上がっており、わたしが考える日本の加速度的に進む出生率低下の問題点を次のように述べさせてもらった。

一つは未だ根強い性別役割分業である。先進国で未だ母親の役割、父親の役割と区別化するのは日本ぐらいで、他国は「親の役割」という。実際、日本の育児・家事・介護という家の中の仕事の9割は女性が担っている。次に、一部戻ってくるとはいえ出産にかかる経済的負担が大きいということ。平均74万円かかる。先進諸外国では保険で無料になる例が多い。特別児童扶養手当も離婚して低額所得の単親家庭にならないと支給されない。次にメディアや世間が親に与えるプレッシャーである。子どもに問題があれば親のせいにする。親に完璧さを要求する。購買力として子どもを消費者にしている企業もよくない。「携帯電話の学割」を考えるのは日本ぐらいだろう。これらがすべて親子関係を難しくしており、子どもを持つことへの不安感を強くしていく。そして、何よりも最大の要因は男性には決して向かれないが女性だけに向けられる社会全体のアナウンスメントにあると思う。ある40代のキャリアを積む既婚の女性は、子どもを持たないことを選択したが口には出せないと言う。出せば「非国民」のように言われるからだ。4人の子持ちの女性も「4人も子どもがいると話すと変な目で見られる」と語る。10代で妊娠・出産しても、未婚で親になっても、この国の多くの人の視線は優しくない。その意識変革なくしては少子化に歯止めはかかるないだろう。